

# 共同体と幼なじみ

——海外児童文学における幼なじみについて——

横田 順子



今、なぜ「幼なじみ」というテーマなのか。「特集趣旨」によると、「さまざまな壁や分断のある社会」の中で「兄弟とも友だちとも違う『幼なじみ』という関係」のもつ力を改めて問い直してみたいということだが、正直言うと最初、その言葉に違和感を覚えた。同じ共同体で育ち共通の体験で結ばれている人々は親密な反面、排他的で、逆に分断を生む土壌なのではないかと思っただからだ。「幼なじみ」パワーが分断を解消することはありうるのだろうか。

この素朴な疑問から出発して、英米の幾つかの作品を例に取りながら、幼なじみという存在が共同体のなかでどのような意味を持ちうるのかを考えてみることにした。

## 1. 共同体の価値観の継承

一〇〇人アンケートの第一位は、モンゴメリ作『赤毛のアン』のアンとダイアナだった。アンがアヴォンリーにやってくるまでダイアナと知り合うのは一歳のときである。

『広辞苑』によると、「幼なじみ」の定義は「幼い時、仲良く遊んだ人」だ。「幼い時」を広く解釈すれば、たしかに二人は幼なじみと言えなくもないだろう。

二人のやりとりは初対面から直球だ。アンが「ねえ、あなた、あたしをすこしばかり好きになれると思って？あたしの腹心の友となってくれて？」とおずおずと尋ねると、ダイアナは笑いながら「あんたがグリーン・ゲイブルスにきてくれて、ほんとにうれしいの」と答える。するとアンは「永久にあたしの友達になるって、誓いをたてられて？」と迫り、二人は早くも永遠の友情を誓いあう。（村岡花子訳、新潮文庫、P.126）

アンがダイアナに最初から迎え入れられているのは、この出会いがお見合いのように保護者によってセッティングされたものだからだ。村のご意見番リンド夫人に認められるという関門を突破したアンは、マリラにダイアナの家へと連れていかれる。もちろんまず最初にアンはダイアナの